

バルト的恋愛主体についての一考察（3）

『ロラン・バルトによるロラン・バルト』と「子供」

滝沢 明子

はじめに

これまでバルト的恋愛主体についておこなってきた考察では、『恋愛のディススクール・断章』（以下、本稿では『恋愛のディススクール』と表記する）およびロマン派の音楽論のなかでバルトが「子供」という概念を重要視していたことを、恋愛主体が「子供」という性質をもってあらわれてくるという指摘を通して論じてきた。

さて、『恋愛のディススクール』に二年先立った 1975 年に、バルト自身が「ロラン・バルト」を論じた書物『ロラン・バルトによるロラン・バルト』（以下、本稿では『バルトによるバルト』と表記する）がある。この著作が断章、アルファベット順といった形式面において『恋愛のディススクール』と共通点をもつものであることは、一見したところで明らかだ。そういった点において、これら二つの作品を書いたときバルトの問題意識はある部分で一貫していたことがうかがえる。一方が自己をめぐる考察であり、他方が恋愛を題材にとりあげていても、である。そのことを、『バルトによるバルト』を中心に扱い、「子供」という問題、そしてロマン派音楽との構造上のアナロジーという問題に焦点を当てて示すことが本論の目的である。

1. 『バルトによるバルト』における「母」と「子供」

ロマン派音楽論と『恋愛のディススクール』においては、「子供」としての恋愛主体、恋い慕われる対象としての「母」という概念が重要なものとなっていた¹。だが、恋する主体が主題になっていない『バルトによるバルト』のな

¹ これについては以下の二つの論考を参照されたい。拙稿「バルト的恋愛主体についての一考察——『恋愛のディススクール・断章』と「ロマン派の歌」、『仏語仏文学研究』第 28 号、東京大学仏語仏文学研究会、2003 年。拙稿「バルト的恋愛主体についての一

かでもまた、「母」と「子供」についての記述がみられる。そこで、『バルトによるバルト』において母子関係がどのように描写されまた扱われているのかをみていくこととする。

まず、冒頭に置かれた写真である。浜辺を歩くバルトの母を写したという、ビントの合っていない写真が大きく載せられている。そして街の写真を置いて三枚めにあらわれる写真は、「愛の求め」と題されている。まだ幼い、といっても体は少年期にさしかかっている、そんなバルトが母親に抱きあげられ、カメラに臆したような表情で彼女に頬を寄せている。バルト的恋愛主体が、母親を恋い慕う子供のごとき心情を純真無垢なものとして掲げていたことを考えると、ここにすでに『恋愛のディスクール』やロマン派音楽論であらためて論じられることになる、「子供」としての恋愛主体が、問題意識としてあったことをみてとることができそうだ。

テキストにおいて、母子関係が描写されているものをとりあげてみよう。「子供時代の思い出 (Un souvenir d'enfance)」というタイトルの断章をみてみたい。以下のようなものだ。

私が子供だった頃、私たちはマラックと呼ばれる地区に住んでいた。この地区は建設中の家だけで、その工事現場で子供たちは遊んでいたのだった。家の基礎工事用に、粘土質の土地に大きな穴が掘られていた。ある日、そんな穴々の一つのなかで遊んだあと、私以外の他のすべての子たちはまたそこから上ってしまった。だが、私だけが上ることができなかった。地上から、上の方から、他の子たちは私を冷ややかした。途方に暮れて！ たったひとりで！ 皆に見られて！ 除け者にされて！（除け者にされているということ、それは外部にいてではなく、穴のなかにひとりであること、公開の場で閉じ込められていること、すなわち、締め出されていることである）。そのとき、母が駆けつけるのが見えた。母は私をそこから引っ張りだし、子供たちから遠くに連れていった。彼らに抗して²。

ひとり穴のなかから地上へ上ることができずに取り残され、からかわれたという幼い頃の遊びのなかで感じた疎外感が述懐され、それを助けてくれたのは母であった、というエピソードだけを語った断章である。これは、母にまつわるよい思い出というより、除け者となった悲しい思い出という意味合い

考察（２）——『恋愛のディスクール・断章』と「老人ノゴトキ子供、子供ノゴトキ老人」、『仏語仏文学研究』第30号、東京大学仏語仏文学研究会、2004年。

² Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes*, in *Œuvres Complètes*, Éditions du Seuil, t. IV, 2002, p. 697. 以下バルトの引用はすべてこの全集により、巻数を略記する。

が強い。というのも、排除されてある状態を寓意的にあらわした逸話であるし、作品中でも語られるような、現実にはバルトが自己を少数派とを感じる様々な場面（左利きである、等々）を象徴しているとも考えられるからだ。いろいろな解釈が可能な断章であるといえる。ところで、恋する主体もまた社会から疎外されている存在であった³。この皆から取り残され排除された子供のバルトの逸話を、恋愛主体の寓意とみなすこともまた可能なのである。実際、『恋愛のディスクール』のなかには恋愛主体が経験する「排除」の感覚が「子供」を通して描かれている場面がある。「不在 (Absence)」のフィギュールには次のような部分があった。

私はひとりで、カフェに腰をすえる。人々が挨拶をしにやってきて、私は取り囲まれ、もてはやされ、おだてられるのを感じる。しかし、あの人は不在である。私は自分のなかにあの人を呼び起こす。私を待ち構えているこの俗世間のお愛想の瀬戸際で、あの人が私を踏みとどまらせてくれるようにと。滑り落ちてしまいそうに感じている誘惑のヒステリーに抗って、私はあの人の《真実》（あの人が私にその感覚だけを与えてくれる）にすがる。私は白らの世俗性をあの人の不在のせいだとする。私はあの人の保護を、回帰を、祈願する。子供を探しにやってくる母親のように、あの人が現れ、世俗の輝かしさから、社会的なうぬぼれから、私を救い出し、恋愛の世界の《宗教的親密さ、厳粛さ》を返してくれんことを⁴。

カフェにて社交のさなかにあるのは、穴のなかにひとり閉じ込められている状況とはだいぶ異なるようにみえる。しかし、ひとりきりでいて（カフェ、穴のなか）望まない他人に囲まれ（カフェに集う有象無象、わんぱくども）、望まない行為にさらされる（「取り囲まれ、もてはやされ、おだてられる」、あるいは取り残され、冷やかされる）という点において、バルトが陥っている状況は共通している。穴に取り残されたときには、母が駆けつけ、他の子供たちに対抗してそこから救い出してくれた。カフェにあって、お世辞を振りまかれ、周囲に様子をうかがわれながら、恋愛主体は恋する相手の出現を待ち望む。その「保護を、回帰を、祈願する」とバルトは書き、恋する相手が「現れ」て、「救い出し」てくれることを欲するのだ、と続ける。待ち望まれる情景は、駆けつけて穴から引っ張りだしてくれた母の姿を思い起こさせる。カフェで浮わついた連中を相手に社交を余儀なくされているとき、恋愛

³ 前掲拙稿「バルトの恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」」、pp. 157-159 参照。

⁴ t. V, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 45.

主体は「子供を探しにやってくる母」のような、恋する相手、すなわち「母」を求めているのだ。「子供」のような自分を助け出してほしいと望んでいるのだ。

大人がカフェで社交のつきあいに堕しているときと、子供が穴のなかにひとりで取り残されているときは、似た状態として考えられうることがわかった。ここで注意したいのは、カフェでの交流は「恋愛世界の《宗教的親密さ、厳粛さ》」との対比において世俗的なものとしてあらわれる、ということである。もし主体が恋愛をしていなければ、恋する相手の不在を感じているのであれば、カフェでの社交にことさらに下品さや軽薄さを見出すことはないだろう。穴のなかにひとりで取り残されている状態は、他の人々や世俗社会から切り離され、ひたすら恋い慕う相手を待ち望んでいる、という点で恋愛をしていることと重なりあうのだ。

このように考えると、穴のなかにひとりで取り残されているということが、恋をしていることである、またその逆、恋をしていることは、穴のなかにひとりで取り残されていることである、ともいえる。『恋愛のディスクール』にはまた次のような記述もあったのだ。「位置を占めて (Casés)」というフィギュールである。

(遊戯：子供の人数よりも一つ少ない数の椅子があり、子供たちが周囲を回っているあいだ、婦人がピアノを鳴らしている。演奏が止まったとき、各々が椅子に飛びついて、ひとりを除いて座る。もっとも不器用な、もっとも粗暴でない、もっとも不運な、ひとり立たずんでいる者を除いて。間が抜けた、余計物。これが恋する人である⁵。)

椅子とりゲームで自分だけ座ることのできずに立ったままの間が抜けた子供は、穴のなかからひとりだけ這い上がることができなかった子供と似ている。どちらも「いちばん不器用でいちばんおとなしく、いちばん不運な」子供である。そして、恋する者とはそのようなものだ、というのである。『恋愛のディスクール』では、恋愛主体は「子供」として描かれたわけであるが、『バルトによるバルト』のなかで語られる「子供」もまた、恋愛主体としての性質をそなえている場合がある、といえる。

⁵ *Ibid.*, p. 75.

2. 「過去想起」

前章において扱った穴の逸話は「子供時代の思い出」と題されていた。ここからは『バルトによるバルト』における「子供」について、子供時代の思い出という側面に光を当てて考察をすすめてみたい。穴のなかに取り残された思い出だけではない。『バルトによるバルト』において、子供時代についての言及は多い。似たエピソードとして、母がコウモリから自分を守ってくれたという、次のような記憶も別の箇所では語られている。

一羽のコウモリが部屋のなかに入ってきた。コウモリが髪にたかるのをおそれて、母は彼を背中におんぶし、そして二人はベッドのシーツにすっぽりくるまわって、コウモリを火ばさみで追い払ったのだった⁶。

外敵に対して、母と子供は一体となって対処し、また母は子供を保護してくれた。穴の上から冷やかすよその子供たちに対抗して、救い出して保護してくれた、という穴のエピソードと同じ構図がみてとれる。これは「休憩：過去想起 (Pause : anamnèses⁷)」と題された断章のなかに述べられている、過去の記憶のひとつである。実際、この断章では、とりわけ子供時代や生徒だった頃の記憶が列挙されている。コウモリの思い出はその四つ目に挙げられているのだが、最初の三つをみてみよう。

おやつに、砂糖入りの冷たいミルク。古くて白い陶器のボウルは欠けていた。かき混ぜるときにスプーンに触れたのは、そのキズだったのか、あるいはよく溶けていないか洗えていなかった砂糖の塊だったのか。

日曜の晩、祖父母の家からの、路面電車での帰り道。私たちは寝室のなかの炉ばたで、スープと炙ったパンの夕食をとったのだった。

夏の夕方、日がいつまでも沈まないとき、母親たちは小道を散策していて、子供たちはその周りを旋回していた。それは祝祭だった⁸。

砂糖入りミルクの「おやつ」、日曜の晩の祖父母宅での質素な夕食、そして夏

⁶ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 684.

⁷ ここで「過去想起」と訳した語は、原語では“anamnèse”なので、プラトンの想起説と関係しており、「一回限りの神秘を現在化することとしての過去のとり返し」や、「すでに獲得しながらも忘れていた知識を思い出すこと」、といったような、通常の過去を思い起こす行為よりも強い意味合いをもつものである。

⁸ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, pp. 683-684.

の夜、小道を散歩する母親たちの周囲を旋回する子供たち。いずれも子供時代の光景の一断面といえる。バルトはこの「過去想起」を俳句になぞらえ、希薄な思い出を「誇張することも、響かせることもなく」そのままに再び見出すための行為であると説明する。以下の部分である。

記憶の微細さを、誇張することも、響かせることもなく再び見出すよう主体を導く行為——享楽と努力の混ざったもの——を私は「過去想起」と呼ぶ。それは俳句そのものだ⁹。

ところで、『恋愛のディスクール』の「思い出 (Souvenir)」というフィギュールで、バルトは恋する人が語る思い出について述べている。バルトはそういった回想された恋愛の光景は絵画的に静止していると説明し、それをやはり同じ「過去想起」であるとして、俳句を引き合いに出して語っているのである。その箇所をみてみよう。

恋愛の光景は、最初の恍惚状態と同様に、事後的にしか作られない。それはまるで私が時間そのものを、時間だけを思い出しているかのように、意味をなさず、少しも劇的ではない輪郭しか見出すことのない過去想起なのだ。それは媒体のない香りであり、記憶のつぶであり、単なる芳香なのだ。ちょうど日本の俳句だけがそれをいかなる運命にも回収することなく言うことができたような、純粹なる消尽のような何かである¹⁰。

『バルトによるバルト』では、「過去想起」が「鈍い（響かない）」もので、「無意味な、意味を免除され」としているとされていた。恋愛の光景としての「過去想起」もまた「まったく感動的なところがな」く「無意味」なもので、さらにはどちらも俳句のようであるという¹¹。俳句とは「純粹なる消尽」としての「過去想起」なのである。では、子供時代の思い出と、事後的につくられる恋愛の光景とのこの一致は、どうして起こってくるのだろうか。『恋愛のディスクール』の「思い出」のフィギュールには、続けて以下のように記されている。

⁹ *Ibid.*, p. 685.

¹⁰ t. V, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 267.

¹¹ ここで扱った箇所だけではなく、バルトはとりわけ『記号の国』(1970)で俳句が意味を免除されていることについて詳しく述べている。また晩年の『明るい部屋』(1980)や1978～1980年にコレージュ・ド・フランスで行われた講義をおさめた講義録「小説の準備Ⅰ・Ⅱ」においてもやはり断片的なエクリチュールとしての俳句の可能性が追究されており、俳句がバルトに与えた影響は非常に大きかったといえる。

(B... の庭の高いところにあるイチジクの実をとるために、長い果物採集竿があった。それは竹と、そこにはめこんだ花模様に剪断された白い鉄の漏斗でできていたのだった。この子供時代の思い出は、恋愛の思い出と同じように機能する¹²。)

このイチジクの挿話は、『バルトによるバルト』のほうに載せられていてもおかしくないような子供時代の思い出である。そして、この子供時代の思い出は恋愛の思い出のように機能する、というのだ。

さて、このフィギュールでは、恋愛のなかでの光景や愛する人にまつわる思い出が半過去形で語られる現象が考察されていたことに目を向けてみよう。『ウェルテル』のなかで、ロッテと果樹園で梨を収穫している場面がウェルテル自身によって描写される部分を引用し、バルトは次のように述べる。

ウェルテルは現在形で物語り、話している。しかし、その光景はすでに記憶という使命をおびている。その現在形の背後で、低い声で半過去形がささやいているのだ。いつの日か、私はこの光景を思い出し、過去に迷い込むだろう¹³。

そして、この恋愛の光景を描写する際の半過去形については、少し先の文章で以下のように説明されている。

半過去形は幻惑の時制である。それは、生き生きとしているようにみえながらも、動かない。不完全な現前であり、不完全な死だ。単に、消耗をさそう記憶のまやかしなのである¹⁴。

恋しい人とともに過ごしているとき、今この瞬間を心に刻んで脳裏に焼きつけておこう、といった気持ちをかきたてられることがあるだろう。そのとき、その情景はすでに思い出となる定めにあるのだ。ウェルテルは、ロッテと一緒に梨を収穫するさまを「たびたびロッテの果樹園におり」「果物最終竿を手にして」「ロッテは下に立っていて…」といったように現在時で語っている。しかし、その光景は二度と再び起こらないであろう出来事として、一幅のタブローの不動性を付与され、ゆえに語られるそばから記憶と化すのである。「役割を演じることを渴望しているので、いくつかの光景は初めから記憶のなかに位置を占める¹⁵」、というわけである。このことから、先ほどの「この

¹² t. V, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 267.

¹³ *Ibid.*

¹⁴ *Ibid.*, p. 268.

¹⁵ *Ibid.*

子供時代の思い出は、恋愛の思い出と同じように機能する」という一文が理解される。後になって想起されたとき、それが恋愛の一場面であろうと、子供時代の一風景であろうと、ある種の光景は「過去へと迷い込む」ことを誘うような幻惑をもって立ち現れてくる。ゆえに、「過去想起」によって思い起こされた子供時代の光景が、恋愛の思い出と同じ機能を持つ、とされるのだ。大きな物語へと回収されない、すなわち意味を免除された俳句のようにあらわれてくる光景を再び見出し、味わうことが「過去想起」なのである。

以上のことから、子供時代の思い出と、恋愛にまつわる思い出は、「過去想起」の観点からバルトにとって同じ働きをもっていたことがわかった。穴に取り残された子供時代のエピソードのみならず、「過去想起」をめぐるもまた、『バルトによるバルト』のなかで語られる子供像が、『恋愛のディスクール』のなかの恋する人との重なりをみせている。そうになると、恋愛主体が「子供」のような性質をもつとされるのみならず、文字通りの子供もまた、恋愛主体と一致する性質をそなえたものとして描かれているようである。この現象を考察するにあたって、次章で『バルトによるバルト』のなかの恋愛にかんする断章をみていくことから始めることとしたい。

3. 「私はあなたを愛しています」

『バルトによるバルト』のうち、子供時代について書かれた断章が『恋愛のディスクール』のいくつかの記述と呼応していることが示された。そこで、今度は『バルトによるバルト』のなかの、恋愛そのものについて言及されている断章を検討してみる。「歓喜の言説 (Le discours jubilatoire)」は、まさに『恋愛のディスクール』を思わせる断章である。そこでは、「私はあなたを愛しています」、という言葉について考察がなされるのだ。それは以下のように始まっている。

—愛しています、私はあなたを愛しています！身体から生じる、抑えきれず、繰り返される、この愛の宣言のすべての発作は、いくばくかの欠如を隠してはいないだろうか？その断言の過剰にあつての欲望の失敗を、イカがその墨によってするように暗く蔽うためでなければ、この語を口にする必要などないだろう¹⁶。

¹⁶ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 689.

次いで、「純粋なる歓喜の言説」の可能性はないのだろうか、という問いが投げかけられ、言語活動がついには「満ち足りてあることの最初の、そして何も意味しないものとしての表現となることは考えられないだろうか」、と続く。そして、「私はあなたを愛しています」という言葉についての次のような考察が記される。

—どうしようもない。それは求めの言葉なのだ。したがって、受け手を困らせることしかできないのだ。それが「母」そして「神」でないかぎり¹⁷！

大文字の「母」が使われていることに注目したい。この、大文字の「母」は、比喩的な意味で恋する相手を表すものとして、『恋愛のディスクール』で多用されることとなる。また、「母」と「神」を愛の完全なる受け手として並列して表現することも、『恋愛のディスクール』の「フェイディング」のフィギュールで行われることとなる。次のようにである。

「母」が、厳しく冷たい様子のこもった顔をしてあらわれる悪夢がある。愛する人のフェイディングとは、「意地悪な母」の恐ろしい回帰であり、愛の不可解な取り消しであり、「神秘主義者」たちによく知られた、見捨てられた状態なのである。「神」は存在し、「母」は現前するが、もはや愛してはくれないのだ¹⁸。

「歓喜の言説」の章において、「愛しています」の言葉や「母」といったように、後に『恋愛のディスクール』において詳しく論じられることとなる要素が先取りされていることがわかる。

もとより、「愛しています (Je t'aime)」という言葉自体について、『恋愛のディスクール』のなかで最も長い断章が書かれているのである。「私は - あなたを - 愛しています (Je-t-aime)」というフィギュールである。そのなかで列挙されてある考察のうちには、「子供」に関係するものがある。二つとりだしてみよう。

私は - あなたを - 愛しています、には使い道がない。この語は、子供のものと変わりがなく、いかなる社会的な拘束にもとらえられてはいないのである¹⁹。

ここでは「私はあなたを愛しています」が子供の言葉になぞらえられている。

¹⁷ Ibid.

¹⁸ t. V, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 146.

¹⁹ Ibid., p. 188.

また、次のものをみてみよう。

私は - あなたを - 愛しています、には他所がない。これは二者関係（母親の、恋愛の）の語であり、そのうちにはいかなる距離もなく、いかなるひずみも記号を分割しにやってこない。それは何のメタファーでもないのだ²⁰。

こちらでは、「二者関係」の語であるという「私はあなたを愛しています」が、母親のものであるか恋愛のものであるとされる。『バルトによるバルト』の先ほど引用した部分で、「私はあなたを愛しています」の完璧な受け手とされた大文字の「母」が表していたのは、まさにこの両方の性質——母親と恋愛——を兼ねそなえた存在である。すなわち、母親のような存在である恋愛の相手だ。『バルトによるバルト』の時点ですでにこうした問題意識は存在していたのであり、それが発展し拡大して『恋愛のディスクール』へとつながっていったことがみてとれる箇所である。

また、『恋愛のディスクール』がロマン派音楽論と緊密に響きあっているのであるから、『バルトによるバルト』における恋愛についての文章にもまたロマン派音楽とのかかわりがみられる。「歓喜の言説 (Le discours jubilatoire)」のすぐ後の断章、「満ち足りてあること (Comblement)」では引き続き「私はあなたを愛しています」という発話にかんする記述が、今度はロマン派音楽との関連でなされている。

すべての詩と音楽（ロマン派の）がこの求めのうちにある：ジュ・テーム、イッビ・リーベ・ディット！しかし、歓喜の応答、もし奇跡によってそれが突発したとしたら、それはいかなるものであろうか？満ち足りてあることの味わいはいかなるものであろうか？—ハインリヒ・ハイネ：あなたが「愛しています！」と話してくれたならどんなにいいだろう。だから私はひどく涙を流さねばならないのです。私は崩れ落ち、倒れこみ、悲痛な思いで涙を流す。

（愛の言葉は、喪のように機能する²¹）。

ロマン派音楽のうちでも、バルトがとりわけ好んでいたシューベルトそしてシューマンには、ハイネ歌曲の数々がある。バルトがハイネの詩をひいているときには、ロマン派歌曲のことも同時に念頭においていると言っていいだろう。バルトがロマン派音楽に強い関心を示すのは、一つは歌の主体が恋する人であるという点においてである。ここでの「私はあなたを愛していま

²⁰ Ibid.

²¹ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 689.

す」にかんしても、「すべての詩と音楽（ロマン派の）が、この求めのうちに
ある」とされている。ロマン派歌曲で歌うのは純粹無垢な恋愛主体である、
とバルトは音楽論で語っているが、そうした考えがここにも反映されている
のは確かである。また『バルトによるバルト』冒頭のアルバム部分の最後に
ハイネの詩が挿入されていることも、この作品とロマン派音楽との関係性の
深さをあらわしている。以上のことから、「子供」のような恋愛主体を称揚す
るバルトの恋愛論が、『恋愛のディスクール』とロマン派音楽論、さらには『バ
ルトによるバルト』を緊密に結びつけている、といえよう。

4. 時代遅れ

『バルトによるバルト』と『恋愛のディスクール』を比較しながら論じて
きたことで、『バルトによるバルト』とロマン派歌曲のつながりもまたみえて
きた。『バルトによるバルト』のなかでもう一箇所、ロマン派歌曲そして『恋
愛のディスクール』におけるロマン派的恋愛主体論と関連する断章を指摘し
ておきたい。「愛、狂気 (L'amour, la folie)」という断章である。ナポレオン
の兵士が恋愛が原因で自殺した、というエピソードについて考察が加えられ
るものだ。そのなかで、バルトは以下のように述べる。

「[...] ロマン派的なやり方で恋をしている人は、狂気の体験を知っている。と
ころで、この狂人には、今日いかなる現代語も与えられていない。結局のところ、
この点において、この人は自身を狂っていると感じるのだ。非常に古い語
でないかぎり——盗むべきいかなる言語活動もない²²。

この断章はもちろん『恋愛のディスクール』を思い出させる。まず「狂気」
を扱ったものとして、「恋愛主体には、自分自身が狂っているという考えが頭
をよぎることがある²³」と説明されている「狂っている (Fou)」のフィギュ
ールと結びつく。また、ロマン派的に恋をしている人は「非常に古い」言葉
よりほかに「いかなる現代語も与えられていない」という記述は、恋愛主体
とは時代遅れの主体である²⁴という『恋愛のディスクール』と主張を同じく
するものだと解することができる。この「時代遅れ」というキーワードは『恋

²² *Ibid.*, p. 668.

²³ t. V, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 155.

²⁴ この「恋愛主体は時代遅れの主体である」ということについては、『恋愛のディス
クール』の序言や「猥褻 (Obscène)」のフィギュールにおいて詳しく論じられている。

愛のディスクール』が書かれる発端にもなっている、恋する主体の「非今日性 (inactualité)」の問題につながっている。バルトは『恋愛のディスクール』という書物が必要とされるのは、恋愛にかかわるディススクールが、現代においてはまったく見捨てられ価値を貶められたものとなって孤立状態にあるからだ、とした。また、ロマン派歌曲における恋する主体についても、その「非今日性」を問題としていた。そうした「時代遅れ」である主体を称揚する場として、恋する者が発話するテキストが編まれたのである²⁵。

「狂っている」ことと「時代遅れ」であることがもたらす効果については、『バルトによるバルト』の「悦楽としてのパラドックス (Le paradoxe comme jouissance)」と題された断章に示唆に富む記述がみられる。以下のようなものである。

G. はひどく興奮し、完全に陶醉しきって、『コンスタンヌ湖畔紀行』の上演から出てきて、次のような言葉でそれを説明する。「バロック的で、狂っていて、キツチュで、ロマンティックで…などなど」。付け加えていわく、「そして、まったくもって時代遅れなんだ！」と。ある種の体質をもった人たちには、パラドックスはしたがってひとつの恍惚、そして破滅であり、もっとも強烈なものなのである²⁶。

狂っていること、ロマンティックであること、そして時代遅れであることが、価値の転倒によって強度と濃密さを兼ねそなえた感情体験になることがある、ということがまさに描かれているエピソードだ。そして、バルトにおいて、狂っており時代遅れであるとされるものの代表は、恋をしていることである。ロマン派的な恋をしたことで狂気を知ることや、時代遅れであることは、それによって恍惚と破滅が表裏一体となった強烈な体験がもたらされうるという点において、価値をもつのである。

ところで、そうした他ならぬ「時代遅れ」という題の断章が『バルトによるバルト』のなかにある。

書物から免除されると、彼の生活は絶え間なく「時代遅れ」の主体のそれであった。恋していたときも（その方法においても、その事実自体においても）、彼は時代遅れであった。母親を愛していたときも（もし彼が父親をよく知っていて、不幸にも愛したとしたら、どうなっていたらうか!）、彼は時代遅れであ

²⁵ 前掲拙稿「バルトの恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」、pp. 137-139 および pp. 158-160 参照。

²⁶ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 688.

った²⁷。

恋愛をしていたときも、また母親を恋慕していたときも、バルトは「時代遅れ」の主体であり続けていた。ここにもう一度、子供として母を愛する状態と、恋をしている状態とが重なり合っている。そして、ここで注意したいのは、この断章はバルト自身について書かれているということだ。バルトそのひとが時代遅れであり、恋する主体であり、母を愛する子供であったのだ。

『バルトによるバルト』のなかに、ロマン派音楽あるいは恋愛主体への言及、そして恋愛主体と重なり合う子供時代への言及が多くなされているのは、バルト自身がまた恋する主体として、子供として存在しているからであったといえよう。

本論第2章の末尾において、『バルトによるバルト』における文字通りの子供と恋愛主体との一致について指摘したが、ここでその理由が明らかとなった。バルトという人物に固有の資質が、子供時代の姿に、あるいは恋している最中にこそ一層あらわになるとしたら、その子供時代と恋愛中の様子に一致がみられることは何も不思議ではないだろう。

5. 還元しえないもの

バルト的恋愛主体が「子供」としてあらわれ、子供が恋愛主体のようにあらわれることは再三にわたり論じてきた。そして、バルト自身の子供時代の光景もまた恋愛の思い出や挿話と同じ機能を果たすものであり、同様の情動を語るものとされることがわかった。『バルトによるバルト』において、子供と恋する人とは、バルトという人物を媒介に結びつくのである。しかし、なぜとりわけ子供と恋する人なのか。ここからはさらに一歩進んで、子供と恋愛主体に共有されているバルト特有の性質をさぐりつつ、二つの主体の一致について掘り下げていくこととする。

『バルトによるバルト』の、冒頭のアルバム部分を手がかりに考えてみたい。三角形の大きすぎる帽子をかぶせられ、浜辺をよちよち歩く幼児の写真が載せられている。下のキャプションには、次のように書かれている。

過去のうちで私をもっとも魅惑するのは幼年期だ。幼年期だけが、眺めたとしても消滅した時間にたいする哀惜の念を私に与えることがない。なぜなら、そ

²⁷ Ibid., p. 700.

ここに私が発見するのは取り返しのつかないものではなく、還元しえないものだからである。いまだに私のうちに存在し、時折思い出したように見いだされるすべてのものだ。子供の、むき出しの身体の中に、私は自身の陰鬱な裏面を読みとる。憂鬱、傷つきやすさ、絶望（幸いにして複数の）しやすい資質、内面の動揺。不幸にも、そのすべての表現を断ち切られている²⁸。

幼児である自分を眺めたとき、そこに「取り返しのつかない (irréversible)」不可逆性をみるのではなく、自身の「還元しえない (irréductible)」本質のようなものを見出すという。興味深い記述である。バルトにとって幼年時代は、大人である自分と切り離されたものではないようだ。それどころか、子供としての自分は、自らのうちで還元不可能なものをそのままに見せてくれるものなのだ。「自身の陰鬱な裏面」、すなわち倦怠や傷つきやすさなどの繊細な感情は、ともすれば大人に属するとされるものだ。しかし、バルトはその源泉、というより変わらぬままのありようを幼年時代にみてとる。不可逆的なものではなく、還元不可能なものが見出される、ということは、もう戻ることのできない姿ではなく、それ以上ないほどの純粋な姿が見出される、ということだ。そしてバルトはその姿に「魅惑」されるという。バルトにとって子供時代とは、いまなお自分のなかに存在し続けている情動が、そのあるがままの無垢なかたちで再認されるという意味において重要なのである。穴のなかに取り残される孤独感や疎外感、あるいは恋い慕う存在との一体感の歓喜といった感情の、もっとも純粋な状態が幼年期のうちにみてとれるのである。それは、自己の純粋状態と呼べるものであろう。

ところで、幼年期のように純粋な情動を、大人になってから再び見出すにはどうしたらいいのだろうか。自己の、還元しえないまでの純粋状態が見出されるのは、恋する人として「子供」となったときであった。「子供」として描かれる恋愛主体は、すべからず無垢な情動を有していた。この点は以前に詳しく論じた²⁹のでここでは指摘するのみにとどめるが、もう一度『恋愛のディスクール』の「あやまち (Fautes)」というフィギュールにある記述を確認してみよう。

それでも、その愛〔情熱恋愛〕のうちには無垢／無罪の苦痛の、不幸の可能性があるだろう（もし私が「想像界」に、母と離された子供の苦しみに忠実であったなら）。そのとき私は、私の心を引き裂いているものを問題にしないだろう

²⁸ *Ibid.*, p. 602.

²⁹ 前掲拙稿「バルト的恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」、pp. 143-149 参照。

し、苦痛を肯定しさえするだろう。それが情熱の無垢／無罪さであろう³⁰。

恋する人がもし母と引き離された子供のように苦しむことを肯定したならば、そこに無垢で罪のない恋愛の情熱が可能となる。恋している状態にあることは、自己の還元しえない姿、すなわち子供の姿にかえることであったのだ。後に付与されるすべての社会的、政治的ないかなる役割からも自由であり、ただ純粹無垢な情動にのみ支配されている、剥き出しの存在に回帰することである。『恋愛のディスクール』のなかには非常に多くの「子供」としての恋愛主体が描かれるが、そのなかからいくつかを例示しておく。まず、「消費 (Dépense)」のフィギュールから引用しよう。

恋愛の豊饒さとは、(まだ) 何びとにもそのナルシズムの発揮と、複数の悦楽とを抑制されていない子供の豊饒さなのだ³¹。

次いで、「奉献 (Dédicace)」のフィギュールのなかの一文である。

歌は、何も言わんとしてはいない。そこにこそ、あなたはついに聴き取るだろう。私があなたに歌をささげていることを。子供によって母親に差し出された毛糸くずや小石のように役に立たぬ歌を³²。

最後に、「あるがまま (Tel)」のフィギュールをみてみたい。

私は、何かを指し示すのに「タ・ダ・ター (サンスクリット)」と、空虚な語を用いるあの小児に似ているだろう。あんなふう、と恋する人はいうだろう。あな³³はあんなふうだ、間違いなくあんなふうだ、と³³。

いずれも、恋しているがゆえに子供に似てしまった、あるいは子供に回帰してしまった恋愛主体が描かれている。このような恋愛主体は、自己のうちに存在し続けていた、還元しえない無垢な性質を再び見出しているといえよう。このように「純粹なる情動」を扱っている側面において、『バルトによるバルト』は『恋愛のディスクール』そしてロマン派音楽論へとつながっているのである。

ふたたび『バルトによるバルト』の引用に立ち戻る。「過去のうちで私をも

³⁰ t. V, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 152.

³¹ *Ibid.*, pp. 116-117.

³² *Ibid.*, p. 107.

³³ *Ibid.*, p. 272.

っとも魅惑するのは幼年期だ」、とバルトは書いた。自身の内面の還元しえない性質がもっとも剥き出しになっている様子を見出して心を動かされている、ということだ。恋する主体を語るときとまったく同様に、自身の子供時代を語るときもまた、バルトは還元しえない本質的な姿に価値を付与していたのだ。穴から出られなかったエピソードもまた、バルトの還元しえない性質をあらわにしているがゆえに重要なのであり、恋愛の場面をはじめ、バルトにまつわるさまざまな事柄のアナロジーとして機能しうるのだ、と考えることができる。

6. 『バルトによるバルト』とロマン派音楽論

最後に、別の観点から『バルトによるバルト』と『恋愛のディスクール』、そしてロマン派音楽論のつながりを論じておきたい。『恋愛のディスクール・断章』とロマン派音楽論が呼応するものであり、さらには『恋愛のディスクール』はひとつの歌曲集のように編まれている、ということはすでにこれまでの論考で指摘した³⁴。また、本論では、『バルトによるバルト』もまた『恋愛のディスクール』およびロマン派音楽論と同様に、純粹なる「子供」の情動を肯定する思想に基づいていることが示された。ここでは、テキストの構造面に目を向けて、『バルトによるバルト』にさかのぼり、バルトの断章観とロマン派音楽論のつながりを確認したい。

『バルトによるバルト』のなかに、ロマン派音楽と断章について書かれた箇所がある。バルトの断章形式が、その音楽観と深くかかわっていることがすでにうかがえる部分である。「断章の円環 (Le cercle des fragments)」と名付けられた断章である。「断片」や「細部」あるいは「書き出し」を好むがゆえに、バルトは断章を好むという。そして、次のように述べる。

何だって、断章を次々に並べるとき、いかなる構成も可能ではないというのか？ もしも断章が、作品群（よき歌、詩人の恋）についての音楽的思想のようであるならば、各々の楽曲はそれ自身でこと足り、またしかしながらその隣接する楽曲の間隙でしかない。そして作品は、テキストの外部によってのみ成り立つ。

（ヴェーバー以前に）断章の美学を最もよく理解し、実践したのは、おそらくシューマンであろう。彼は断章を《インテルメッツォ（間奏曲）》と呼び、そ

³⁴ 前掲拙稿「バルト的恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」、pp. 157-160 を参照。

の数々の作品のなかでインテルメッツォ（間奏曲）を増加させていった。彼が作りだした曲のすべては、結局のところ挿入されたのである。だが、何と何の間にであろうか？ 中断の連続は何をあらわそうとしているのだろうか³⁵？

バルトが用いる断章形式は、シューマンの間奏曲と同様の思想に基づいている、とされている。一つ一つが独立したものでありながら、それぞれの楽曲をつないでいるに過ぎないのが間奏曲である。すべての曲はいわば「挿入」されているので、それぞれの間奏曲は隣接する楽曲の間隙でしかなく、その全体は「中断」の連続でしかなくなる、というわけである。

ところで、まさにシューマンの間奏曲の性質について、バルトが論じた音楽論がある。『バルトによるバルト』と同じ1975年に発表された「ラッシュ」である。それはこう始まっている。

シューマンの『クライスレリアーナ』において私は、実をいえば、いかなる音も、いかなる主題も、いかなる意図も、いかなる文法も、いかなる意味も、作品の何らかのはっきりした構造を再構成することを可能にするようなものは何一つ聞きとってはいないのだ³⁶。

シューマンの『クライスレリアーナ』を聴いていても、「作品」の全体としての構造を把握し、それを再構成しうるような要素を見出すことがない、というのだ。間奏曲が「全体」の構造化、あるいは再構成を拒むものとして解釈されているといえる。間奏曲の特質が言語の比喩を使って表されていることから、バルトが断章形式によって「超越性の危険性を軽減」しようとしていたことと、このように間奏曲を好んで論じていたことは通じていると考えられよう。「ラッシュ」にはまた以下のような文章もみられるのだ。

インテルメッツォは、挿句楽節がその名を持たず、気をそらせ楽しませる働きではなく移動させる働きを持つ場合でさえも、すべてのシューマン作品と不可分のものだ。まるで用心深いソース作り職人のように、それは言説が固まってこびりつき、どろりと濃くなり、のび広がり、賢しげに展開の文化のなかに入っていくことを妨げるのである。それは（すべての言表行為がそうであるように）あの更新される行為であり、それによって身体は絶え間なく動いて、芸術的な言葉の単調さをかき乱すのである。究極的には、間奏曲しか存在しないの

³⁵ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 671.

³⁶ t. IV, *Rasch*, p. 827.

だ。中断されたものが、今度は中断され、そしてそれが繰り返される³⁷。

これは間奏曲について述べられた部分だが、バルトの断章観と一致をみせている。『バルトによるバルト』のなかの「真実と固さ (vérité et consistance)」という断章では、語や観念が「固まる (prendre)」ことへの抵抗が書かれているし、「アルファベット (L'alphabet)」という章では次のような記述がある。

アルファベットは、幸福感をもたらすものだ。《構想》の苦悶、《展開》の仰々しさ、ゆがんだ論理はもうお終いだ。小論文は終わりで³⁸！

断章をアルファベット順に並べることは、「意味が《固まる》ことを妨げる」のであり、それこそが目的なのだとされている。バルトが断章、あるいは間奏曲を好む背景には、「固まる」ことへの抵抗感があるのだ³⁹。「私がもう覚えていない順序 (L'ordre dont je ne me souviens plus)」という章では、以下のよう

[...] しかし、重要なのはそれらの小さなネットワークが互いに結びついておらず、書物の構造、その意味という一つの大きなネットワークへと滑り落ちていかないことである。それは、主題の運命へと言説が下降していくのを食い止め、逸らし、分裂させるためである⁴⁰。

『恋愛のディスクール・断章』は、恋する主体をめぐるひとつの歌曲集のように作られている。これが、ロマン派歌曲集を自己のエクリチュールにおいて実践した作品だとすると、『バルトによるバルト』は、シューマンに代表されるロマン派の間奏曲を意識して、そのように編まれているといえよう。どちらについても、ロマン派の音楽が、その断章形式のもととなっているのだ。

バルト後期の断章についての思想は、ロマン派音楽論とのかかわりにおいて着想されているといえよう。間奏曲的な断章、そして恋する主体をめぐる歌曲集へ、『バルトによるバルト』から『恋愛のディスクール』への推移がみとれる。この観点からも、『バルトによるバルト』と『恋愛のディスクール』、

³⁷ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 828.

³⁸ *Ibid.*, p. 720.

³⁹ ただしこの「固まる」ことについては、後年ブルースト論「固まる」(1979年)では肯定的に論じられることとなる。そこにおいてバルトは「固まる」ことを断片的なテキスト群が一つの長大な作品へと作りあげられていく様子としてとらえており、語の意味付けの変化はもとより思想的な転換が認められる。

⁴⁰ t. IV, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 722.

そしてロマン派音楽論は豊かに響きあっている、といえるのだ。

まとめ

『バルトによるバルト』における「子供」が、ロマン派音楽論や『恋愛のディスクール』で語られる恋愛主体と同様の性質をそなえていることを、さまざまな角度からみてきた。また、断章形式についてのアプローチからも、ロマン派音楽論と『恋愛のディスクール』、『バルトによるバルト』が一貫した思想に基づいていることが示された。「子供」、恋愛主体、そしてバルト自身は、その還元しえない資質において一貫性をみせるのである。どれも皆、穴にひとり取り残されたような存在である。

『バルトによるバルト』において幼年期への言及がなされる部分では、自身の最も純粋な状態を提示しようとする意図があるといえる。繊細な情動が還元しえない姿であられでるのは幼年期においてである、とバルトは考えているのだから、恋愛主体を語るときに「子供」の例が多用されるのは当然の結果である。自己の純粋状態を示そうとするときにも、恋愛主体の純粋状態を示そうとするときにも、同様に「子供」を語ることが有効となるのだ。それゆえ、『バルトによるバルト』にも『恋愛のディスクール』にも、幼年期、または「子供」が多く語られることとなるのである。

「幼年期」というテーマは、バルトにおいてさらにエクリチュールの問題へと発展していくものでもある。『バルトによるバルト』では、「固有名詞」という断章で、幼年期を過ごしたパイヨンヌで聞いた数々の固有名が、「欲望と死」の問題を喚起する、と述べられている。この部分は、ブルースト論との関連で考察されるべきだろう。また「匂い (Odeurs)」という断章では、幼年期を過ごしたパイヨンヌの「匂い」が、ブルーストにとって思い出の導線となった事物との対比で語られる。恋愛主体の「子供」としての側面が、ブルーストとの関連で論じられうるのだから⁴¹、バルトの「幼年期」にかんする思想もまたブルーストとの影響関係が深いと考えられる。この点については、また稿をあらためて論じることとしたい。

⁴¹ 前掲拙稿「バルト的恋愛主体についての一考察——『恋愛のディスクール・断章』と「ロマン派の歌」、pp. 149-154 参照。